

植民地時代に柳永模に影響を与えた 安昌浩の新民思想

Influence of Ahn Changho's Shinmin Thought on Yu Youngmo
in Korea's Colonial Period

ヤン ジュハン
楊 周漢
Joohan Yang

キーワード

柳永模、安昌浩、独立協会、新民会、新民思想

KEY WORDS

Yu Young-mo, Ahn Changho, Independence Club, Shinminkai, Shinmin thought

要旨

柳永模は、韓国が開港した1875年から15年が過ぎた1890年に生まれ、プロテスタント・キリスト教の宣教師が来韓した1884年から20年が過ぎた1905年にキリスト教に入信した。また20歳の青年になった1910年には祖国が強制的日韓併合による日本の植民地になった。このような激動の時代の中で、彼は一生聖書と東洋経典を深く研究し、徹底した宗教修行的実践を行なった。

この論文は青年柳永模が日韓併合という時代状況の中で宗教修行の道を歩んだ背景に関する調査である。彼は青年期に安昌浩アンチャンホが設立した「新民会」の会員との深い交わりを通して安昌浩の思想の影響圏の中で生活した。安昌浩 (1878-1938) は1896年頃にキリスト教に入信し、当時の「独立協会」が主導した民権運動に参加することを通じて民権に関する自覚を持つようになった。安昌浩は米国留学後の1907年に帰国して新民会という組織を設立して新民運動を展開していった。彼は植民地という危機の状況を克服するためには、民の主体的実力を養成することが何よりも重要であると強調した。また実力には軍事的、経済的、外交的実力も重要であるが、最も根本になるのは人格であり、良心と理性に基づいて確保される自由であると論じた。

SUMMARY

Yu Youngmo (1890-1981) was born in 1890, 15 years after Korea opened a port to Japan in 1875. He became a Christian in 1905, 20 years after a protestant missionary came to Korea in 1884. He was 20 when Japan annexed Korea in 1910. During these troubled and agitated times, he carefully studied the Bible as well as the Eastern scriptures and practiced religious self-discipline. This paper investigates the background of his religious faith and practice during the annexation of Korea by Japan. In this time, he was influenced by Ahn Changho's thought because he had a deep relationship with the Shinminkai (New People's Society), which was founded by Ahn.

Ahn Changho (1878-1938) became a Christian in 1896 and learned about democratic thought and civil rights by joining the Independence Club. When he returned to Korea in 1907 after studying in America, he organized Shinminkai and developed the Shinmin Movement. He emphasized that, first and most importantly, the people themselves must cultivate their power and ability to overcome the crisis of colonization. He claimed that character, freedom of conscience, and reason were more important than military, economic, and diplomatic power.

1. はじめに—柳永模に関する簡略な紹介と問題提起

本論文は、キリスト者であった一人の青年（柳永模）が植民地時代に宗教的修行の道を進むようになったことにはどのような思想的な背景があるのかに関するものである。先ず柳永模の生涯を簡略な紹介する。柳永模（1890-1981、韓国人）がソウルで生まれた年は、韓国（朝鮮）が開港した1876年から14年後であり、プロテスタント宣教師が来韓した1884年から6年が過ぎた時であった。彼はYMCAの総務であった金正植（1862-1937）によってキリスト教に出会い、1905年（15歳）から蓮洞教会に出席し、キリスト教に入信し、20代前半まで礼拝参加や伝道など教会活動に熱心な青年であった。彼は20歳（1910年）の時、民族救国精神に基づいて建てられた「五山学校」の教師になった。

五山学校は、李昇薫（1864-1930）が安昌浩（1878-1938）の思想に影響を受け、「新民会」に参加し、建てた民族学校である。柳永模はここで多くの新民会の人物と出会った。また彼はこの時期にトルストイの書物を読み、『華嚴経』や『老子道德経』等の東洋経典を読んだ。そして23歳の時、留学のために日本に渡ったが、突然大学へ

の進学を断念し、一生を田舎で農業をして生きることを決心して、帰国した。その後、彼は一生涯、聖書と東洋經典に深く傾倒し、徹底した修行的実践を行って、独自のキリスト教体系を構築した人物になった。

彼は、崔南善^{チュナムソン} (1890-1957) が発刊した雑誌『青春』に「私の1234」(2号、1914)、「活潑」(6号)、「農牛」(7号)、「今日」(14号1918)、「無限大」(15号)等を発表していく中、1918年(28歳)に自分の年齢を年数ではなく日数で計算し始めたが、これは一日が即ち一生そのものであると考え、一日(今日)を忠実に生きていくためであった。そして1921年(31歳)から2年間、五山学校の招聘を受けて校長職を務め、この時に弟子咸錫憲^{ハムソクホン} (1901-1989)に出会った。そして1928年(38歳)に、当時の民族指導者であった李商在^{イサンジェ} (1850-1927)の代わりにYMCAで「研経班」を指導するようになり、35年間「研経班」を指導しつつ、多くの人々に大きな影響を与えた。また、彼は1941年(51才)から「一日一食」を始め、妻と「解婚」を宣言して妻を姉としてもてなし、毎日板の上で寝た。これは「イエスのゲツセマネの祈りと十字架」を「生中死」(生の終わりではなく、生の真ん中で死に進む)の教えとして受け入れ、それを実践するためであって、これを一生行った。彼は韓国戦争(1950-1953)を経験した後に、この地に御言葉が切実に必要であると感じ、1955年4月26日に自分の死亡日(1956年4月25日)を公開的に宣言し、日記を作成し始め、1975年まで20年間記録した。この日記は即ち彼の思想録である。

このような柳永模の人生と思想は、今日の韓国神学界において土着化神学、宗教神学、生命神学の分野で研究され、また民主化市民運動界においては咸錫憲^{ハムソクホン}の師匠として「シアル思想」の分野で研究されている。また、2008年にソウルで開催された「世界哲学大会」(THE XXII WORLD CONGRESS OF PHILOSOPHY 2008)では、韓国を代表する思想家として世界に紹介されて哲学界でも研究され始めた。

本論文は、先に述べた通り、青年柳永模の周囲の人々の研究を通じて、彼がどのような時代の流れの中に立っていたかを理解するための作業である。特に柳永模の青年期は強制的な「日韓併合」という時代状況の中にあった。祖国が植民地になり、数多くの志士が祖国の独立のために犠牲的活動を展開していた。ところが同じ時代状況の中に、柳永模は宗教修行の道に進んだ。ソウルの近郊で農業を始め、研経班で經典を教え、「一日一生」、「一座」、「一日一食」、「解婚」、「生中死」などの宗教修行を実践していった。

このように、彼が当時の時代状況の中で宗教修行の道に進んだことはどのような背景を持っていたのか。この質問に対する答として、先ずトルストイの影響、弟である柳永黙^{ユヨンムク}の死、『華嚴経』と『老子道德経』の影響などが考えられるが、植民地化という当時の韓国の状況と関連して、もっと直接的な思想的背景になった人物は安昌浩^{アンチャンホ}であ

る。この論文は、先ず安昌浩がキリスト教に出会い、熱心に教会生活を行いながら、「独立協会」に参加して民権に関する自覚を持つようになったことを述べた後に、植民地の状況を乗り越え、独立に進むための方案として強調した彼の「新民思想」がどのような内容を持っているのかを分析する。このような作業を通して、柳永模の独特な生の背景をより確かに把握することができると思うからである。

2. 安昌浩のキリスト教入信

アンチャンホ（1878-1938）は韓国（朝鮮）が開港して2年が過ぎた年に平安南道江西郡ピョンアンナム ドガン ソグンで生まれた。彼は日清戦争当時、最も熾烈な戦闘の一つであった平壤城戦闘（1894年）を直接目撃し、衝撃を受けて、救国の意思を持つようになった²。18歳になった1895年に学問を進めようと決意し、単身でソウルに上京したが、その時は1884年来韓したプロテスタント宣教師が宣教活動を始めてから10年目という時であった³。宣教活動の中で医療分野においては1885年4月にアーレン（H. N. Allen）によって最初の西洋式の近代的病院であった済衆院を設立したのちに、各地域に病院が建てられた⁴。教育宣教の分野においては、1886年にアペンゼラー（H. G. Appenzeller）によって培材学堂が、1886年5月にはアンダーウッド（H. G. Underwood）によって救世学堂が、1886年5月にはスクレントン（W. B. Scranton）によって梨花女学堂が、1887年6月にはエラーズ（A. J. Ellers）によって貞洞女学堂が建てられ、各地域にも学校が建てられていった。また教会の数は、*The Korean Repository* の1895年10月号によれば、全部で12箇所（監理教会が4つ、長老教会が8つ）が設立され、洗礼信徒が528人、洗礼学習者が567人、幼児洗礼者が50人であり、1894年度には入信者が202人、キリスト教の家庭が55家庭であると報告されている⁵。1885年から始まった宣教活動は、10年程度の短い時期であったが、開化という時代史的流れと宣教師たちの教育と医療の宣教活動そして韓国人信徒たちの伝道活動によって、その勢力が徐々に拡張されていった。

アンチャンホはソウルに上京して宣教師が経営する「救世学堂」に入学した。救世学堂の登録学生数は50名ほどであり、教育科目は聖書をはじめ算術、地理、音楽、生物など近代的な学問であった⁶。教育内容は具体的には知られていないが、少なくともキリスト教思想と西洋、特にアメリカの政治、経済、社会、文化などの概略的な内容が含まれていたと考えられる。彼はそこでキリスト教と西欧の近代的な世界観を受け入れるようになった⁷。

安昌浩は救世学堂の韓国人教師であった宋淳命ソンスンミョンの影響を受けて、キリスト教に改宗し、キリスト教信仰に熱心な青年になった⁸。宣教師アンダーウッド（H. G.

Underwood) が刊行した『キリスト新聞』の1897年7月1日号に次のような記事があった。

平壤近郊に住んでいるイ・ソクカンという人がいる。彼は貧しい人であるが、学徳を備えた人であった。何回も伝道を受けたけれども、なかなか信じなかった。ソウルで学堂に通う安昌浩という人が去年イ・ソクカンを訪ねて、自分は前に犯した罪によって死ななければならない者であった事を一つ一つ話し、涙を流しながらイエスの十字架による救いを真心で伝えた。イ・ソクカンはこの話を聞いて心に聖霊の感動を受け、自分の罪を悔い改め、キリスト教に入信した。その後、その町に礼拝堂が設置され、信徒は60名になり、一心に主を敬い、イエスを伝道していた⁹。(筆者翻訳)

この記事を見ると、安昌浩が当時伝道熱心な青年であり、彼の初期の信仰は「罪の自覚とイエスの十字架による救い」という信仰に基づいていることが把握できる。また、『朝鮮イエス教長老会史記』を見ると、安昌浩は故郷である平安南道江西郡に「灘浦理教会」^{ナンボリ}「青山浦教会」^{チオンサンボ}などの教会が建てられる時に大きな役割を果たした、と記録されている¹⁰。

3. 安昌浩の独立協会の活動に参加—民権に関する自覚

安昌浩^{アンチャンホ}がソウルで救世学堂に通っている1897年に徐載弼^{ソジェビル}(1864-1951)による独立協会が発足し、民権運動が展開された。徐載弼は「甲申政變」(1884年)の一員であったが¹¹、甲申政變の失敗後、アメリカに渡ったのちにキリスト教徒になり、医学を勉強して医師になり、アメリカの市民権を取得した人物であった¹²。その後、彼は1896年に「甲午改革」の改革勢力の招待で国内に戻るようになった。徐載弼は、改革の成功は民の自覚と支持によって可能になるという立場で、民権運動を展開していった¹³。彼は民の啓蒙のために純ハングル新聞である『独立新聞』を発行し、「独立門」を建立して国の独立精神を高め、各種の討論会を開催して社会政治に対する批判的意識を高揚させた¹⁴。民権運動は多大の反響を呼び起こし、ソウルの市民たちの積極的な参加によって、民が主体になって自発的に集まる大規模の集会である「万民共同会」が開かれた。この万民共同会の展開は、1898年10月28日から6日間、ソウルの鍾路^{ジョン}において開かれた大規模の「官民共同会」の時に絶頂に達した。この時にソウルのすべての商店が休業し、政府の官僚と各界各層の民衆が集まって演説と討論を行った。集まって演説をした人は、学生と知識人だけではなく、儒学者と僧侶などの宗教

者、様々な障害を持っている人、社会から「^{ベクジョン}百丁」と呼ばれ賤民として扱われている人々であった。この時に政治改革のための「献議6条」が、官民一致で合意された。この結果は、今まで政治から除外された一般民衆が政治の政策を決める場に招かれたという意味と、民衆の力によって政治政策を変えることが出来る体験を与えたという意味を持った。「万民共同会」は自由民権、自強改革、自主独立を主張し、政治運動を展開していった¹⁵。この時に徐載弼は民権運動を展開しながら、新たな文明の宗教としてキリスト教を宣伝した。

安昌浩はおそらく1898年後半期から独立協会の活動に参加した¹⁶。彼は平壤に独立協会の関西支部を設立するために活動しながら、各種演説会に参加し、愛国運動家、青年雄弁家として名声を博した。彼は民権運動に参加しながら、儒教的王道政治（専制王権政治）とは違う西欧的議会民主政治について自覚するようになった¹⁷。しかし民権運動を引っ張っていた独立協会が、当時政権を握っていた守旧派の捏造した政治工作により解体されたし¹⁸、民の自発的な政治大会であった「万民共同会」も軍隊によって解散させられた¹⁹。その後、安昌浩は故郷に帰って教会と学校の建立に力を尽くしたが、1902年9月に宣教師の推薦で神学と教育学を学ぶために太平洋を渡ってアメリカに行った²⁰。

4. 安昌浩の新民思想と新民会運動

^{アンチャンホ}安昌浩がアメリカにいる何年かの中に韓国の政治状況はますます厳しくなっていた。日露戦争以後1905年に韓国の外交権が日本政府によって強制的に奪われた時に、彼は救国活動のために帰国を決心した。彼の救国のプロジェクトは「新民会」を組織する事であった。彼は1907年の初めに、まずアメリカで^{イガン}李垞、^{イムジョンギ}林俊基などの同志と共に国権回復運動団体として「大韓新民会」を發起し、国内の組織のために帰国した²¹。

新民会の目的と方法は「大韓新民會通用章程」第2章第1節に示されている。「本会の目的は我国の腐敗した思想と習慣を革新して国民を維新し、衰退した教育と産業を改良して事業を維新し、維新した国民が統一連合して、維新した自由文明国を成立するためである。²²」つまり新民会が追求していることは国民を維新して朝鮮（大韓）に自由文明国を建設することである。この文章は新民会の最終目的とその目的を達成するための方法を表現している。第一に、新民会の目的は祖国独立の達成ばかりではなく、独立以後にどのような国を建てるかを明らかにしているが、それは「維新された国民の自由文明国」、即ち民主共和国を意味した²³。当時は朝鮮王朝体制がそのまま維持されていたので、祖国の独立のための活動を展開しつつも、儒教的王道体制を志向する傾向があったが²⁴、安昌浩は民主共和国という確かな方向を提示した²⁵。

第二に、目的を達成するための方法であるが、それは「国民の維新と統一連合」であった。つまり民が新たに成り、新たに成った民が統一連合して独立を完遂し、民主共和国を建立する、という意味であった。ここで安昌浩が構想した「国民の維新」とは国家の支配による民の更新ではなく、国の主人として民が自ら自分の実力を養成する、という意味であり、民が自ら実力を養成した後に民の総体的実力行使を通して独立と民主共和国を建立する、という意味であった²⁶。

これは、直時的な義兵抗争（軍事実力を備えないまま儒教的義憤で行う武力行動としての義兵活動）よりは²⁷、民の実力養成に邁進するのが一番緊急なことであり、という意味を含んでいた²⁸。民の実力養成として、彼が行った具体的な行動は「新民会」という秘密結社を結成して各種事業を展開していったことである。それは一番目に、平壤の「大成学校」を始めとして全国に学校を建立する等の教育救国運動、二番目は、啓発演説大会と学会活動、三番目は、雑誌と書物の出版運動、四番目は、最初の株式会社である「平壤磁器製造株式會社」など民族産業運動、五番目は、「青年学友会」という青年修養団体の結成、そして六番目は、独立軍基地建設の模索であった²⁹。

このように即刻的な義兵抗争より民の実力養成運動を優先したのは、彼の歴史認識と革命方法論に起因している。彼は1907年に次のように演説した。

毎度「時がさし迫っていて猶予できない」と話し、「百年河清（百年河清を待つ）」を嘆き、「有りのまま、急いで」革命の旗揚げをして、毎度失敗したのではないのか。…甲申の年（1884年）から団結と教育、産業主義として国力培養運動を展開していたとすれば、すでに二十年の発展と成果があったのではないか。丁酉の年（1897年）から実力運動をしていたとすればもう既に十年の成就、十年の教訓ではないか。…このような力の準備こそ独立目的の達成の唯一無二の捷徑である³⁰。（筆者翻訳）

彼は開港（1876年）以後の30年間の歴史を批判的な視座で反省していた。甲申政変（1884年）、東学農民戦争（1894年）、甲午改革（1894年）、独立協会と万民共同会（1896-1898年）等、全てが革命を志向しているが、それが成功しなかった大きな理由の一つは十分な民の実力を養成しないまま行った急進行動であったからである³¹。従って革命の成功のために、急がなければならないことは教育、啓発、学会活動と団体（集会結社）活動を通して、民が自ら国の主人であることを覚醒し、主人としての多様な実力（知識、産業、軍事等）を養成することである、と主張した。結局、革命（民族の独立と民主共和国の建設）は民の実力が養成された後に民の参加と支持そして統一連合を通して成し遂げることが出来るということであった。ここで大事なこと

は、「新民思想」が当時全ての改革が失敗したという敗北意識を乗り越える新たな方法を提示したことであり、今からでも順々に民の実力を養成していくなら必ず独立と自由文明国の建設は成功できるという希望を提供したことである。また最も重要なことは歴史の革命を完成する主体が民であることを主張している点であった。つまり彼の新民思想は、民が自ら思想を覚醒し、自分の事業を革新し、団体活動と統一連合を通して民の総体的実力を構築して進むことを力説した。

5. 安昌浩の修養団体の結成と活動

アンチャンホ
安昌浩は、実力には経済的、軍事的、外交的実力も重要であるが、最も根本となるのは人格修養（人格という実力）であると強調し、「青年学友会」、「興士団」、「修養同友会」のような修養団体を結成していった。彼は次のように発言した。

今日の世界は民族競争の時代である。独立した国家が無くては民族が立つことが出来ないし、個人が存在することも出来ない。又、国民一人一人が覚醒して大きな力を発揮しなければ、祖国の独立を維持することが出来ない。大きな力を発揮する道は、国民の一人一人が奮発修養して道徳的に偽りの無い真の人格を持ち、知識と技術に有能な人材になって、そのような個人が国家千年の大計のために堅固な団結をする事である³²。

世の中の全ての事が力の産物である。…誰でも自分の目的を達成するためには先ずその力を求めなければならない。…力は健全な人格と堅固な団結から出ることを私は確かに信じる。従って人格の訓練と団結の訓練、この二つが青年の諸君に切に願う事である³³。（筆者翻訳）

安昌浩には民族の独立という確かな目的意識があった。それは当時の民族競争という民族国家体系で編成されているので、独立した民族国家に所属されていない個人（植民地の人民）は自分の自由と権利を保障する事が出来ないし、民主共和国の建設も実現不可能であるからである。ところが彼はこの目的を達成する力に関して何よりも「偽りの無い真の人格」、「健全な人格」を重視した。これが「新民思想」の特徴である。個人の人格（良心と理性）を重視したのは、これが独立のための実力でありながら、独立以後に民主文明国を建てるための実力にもなるからであった。安昌浩は次のように語った。

民族社会は一人一人の人民によって構成されたものなので、人民一人一人の方

針と計画が集まって一つになる時に共通の方針と計画即ち合同の目標が生じる。これが民族社会の原則である。この故に各個人はこの原則に基づいて真心を持って自分の知恵で研究し、各々意見を発表していくと自然淘汰と適者生存の原理によって結局、世論が形成されていく。この世論が民族の志であり命令である。私達は自由の人民であるので、絶対に奴隷的になってはいけないのである。私達に命令することが出来るのはただ各自の良心と理性だけである。絶対に、ある個人や団体に従属してはいけないのである³⁴。(筆者翻訳)

安昌浩は民の主体性とその主体性を現実化する民の実力を重視した。彼は、民が奴隷的な人間にならずに、自ら実力を養成し、自らの良心と理性を通して自由に討論し、合議し、世論を形成した後に統一連合を通して、自由文明国を建設していく事を夢見た。安昌浩は民族国権の喪失という状況の中で独立という目的のために活動したが、その独立だけが最終目的ではなく、朝鮮に「自由文明国」即ち民が主人になる国を建てる希望を持って、「新民思想」(新民会活動)を展開して進んだのである³⁵。

6. 安昌浩の新民思想という背景の中で宗教的修行の道を進んだ柳永模

柳永模が安昌浩と直接出会い、彼の教えを受けたという資料はない³⁶。しかし青年柳永模が安昌浩の新民思想の影響の中に立っていたのは確かである。それは、柳が20歳の時に五山オサン学校の教師として活動しながら、新民会の会員との深い交わりを持っていたからである。五山学校は李昇イスンフン薰によって設立されたが、彼は安昌浩の彼は安昌浩の新民思想に感銘を受けてそれを実践するために五山学校を建て、一生安昌浩の思想を実践した人物である³⁷。柳永模は五山学校で李昇薰に出会い、彼を一生の間、師として尊敬した³⁸。五山学校で李昇薰だけではなく、新民会の会員であった呂準リョジョン(1862-1932)、申采シンチェホ浩(1880-1936)、尹琦ユンギソプ燮(1887-1958)などに出会い、深い交わりを持った³⁹。

安昌浩の新民思想は朝鮮が国権を奪われて民衆が苦難を受けた時に、それを克服する代案として、民の実力を養成して民が主体として立つ道を提示した。これが非現実的であると批判を受けた事もあり、誤解を受けた事もあった。しかし新民思想の重要性はたとえ短期間に可能な方法ではなかったとしても、民の主体性を強調し、主体的な実力を養成した民の統一連合を通して新しい国の建設を提示した点である。

安昌浩の新民思想は確かに青年柳永模に影響を及ぼしたと考えられるし、民族の危機の中で宗教修行の道に進む思想的背景になったと思われる。青年柳永模は安昌浩の新民思想を受容して、民の主体性と実力養成を宗教修行の領域において追求した。柳

永模は一生の宗教修行を通して、民の地平を「民族主義的民主国家を建設する主体性という安昌浩の地平」からより深化させ、更に根本的地平である「霊的であり、宇宙的であり、修行的である地平」へ拡張させたと評価できる。また、柳永模の生と思想は、キリスト教の信仰を修行論的地平の上に再構成する道を見せていると言える。

彼の宗教修行は状況の回避でもないし、社会から離脱した個人的修養でもなかった。彼にとって宗教修行は、安昌浩が新民思想を通して強調した主体的人格の実力を成熟と変化させるための重要な実践であった。従って彼は脱俗に留まらずに、五山学校の校長職を受け持ち、研経班で經典を教え、『聖書朝鮮』の人たちの要求に応じ、咸錫憲をはじめとした弟子たちと交流した。結局一人の民であることを願った柳永模は、自然の野草が厳しい冬の間には大地の中に自身を隠して自分の生命の実力を熟成させて、春がめぐり来る時に大地のあちこちに命の芽を吹くように、自身をしっかりと隠して主体的人格の実力を養成し、時が許されたときに芽を吹き、新たな花の種を歴史の大地に蒔いた人物になった。⁴⁰

注

- 1 安昌浩とキリスト教の関連について参考になる論文は次の三つである。チェ・ギヨン (최기영) 「^{ドサン}島山安昌浩の基督教信仰」『^{ドサン}島山思想研究』5、島山思想研究会、1998。李萬烈 (이·만요르) 「^{ドサン}島山安昌浩と基督教信仰」『韓国近現代史研究』22集、韓国近現代史学会、2002。イ・ドクジュ (李徳周) 「日帝下の基督教民族運動と社会主義」『神学と世界』監理教神学大学、2008。
- 2 朱曜翰 (츄·ヨハン) 『安島山全集』上：「傳記篇」、범양사、1990、p.23。「救世学堂」の学校名は1905年に「徹新学校」に変わった。柳永模は1907年に徹新学校に入学した。
- 3 韓国は1882年に米国とは修好通商条約を結んだが、その中には宣教師はなかったので、宣教師が来韓できなかった。2年後の1884年6月24日、日本に在留するアメリカ宣教師であるマクレイ (R.S. Maclay) が韓国を訪問した時、高宗から医療と教育の範囲の中での宣教活動に関する許可を得た。宣教の許可を受けた米国は、1884年末に米監理会所属の宣教師であるアベンゼラー (H. G. Appenzeller、教育担当) とスクレントン (W. B. Scranton、医療担当)、そして米国北長老会所属の宣教師アンダーウッド (H. G. Underwood、教育担当) とアーレン (H. N. Allen、医療担当) の派遣を決めた。
- 4 박효생 (パク·ヒョウセン)、「韓国基督教の医療運動史」『韓国基督教成長100年』、基督教文社、1986、pp.101-102。
- 5 『The Korean Repository』(1895年10月号)、pp. 382-385：李萬烈 (이·만요르)、「旧韓末における韓国信徒における民族意識の形成過程」『韓国史論』1973、p.338再引用。
- 6 F. S. Miller, *Report of Boys School of Mission*, Oct. 16th. 1896 (Reports and Letter from Korea Mission, PCUSA, 1884-1920)。(島山安昌浩先生全集編集委員会『^{ドサン}島山安昌浩全集』第5巻、島山安昌浩先生記

- 念事業会、2000、pp.67-75、参照。)
- 7 このような救世学堂での経験は西欧の近代的民権運動であった独立協会の活動に積極的に参加するよう導いた。
 - 8 朱耀翰（チュ・ヨハン）、前掲書、p.24。安昌浩が信仰告白をするようになったのは遅くとも1895年であると推定される。李萬烈（イ・マンヨル）「島山安昌浩と基督教信仰」『韓国近現代史研究』22集、韓国近現代史学会、2002、p.50。
 - 9 「平壤ボトムンアン教会」『基督新聞』1897年7月1日。（島山安昌浩先生全集編集委員会『島山安昌浩全集』第5巻、p.77、参照）
 - 10 「朝鮮예수교長老会史記」、朝鮮aa教長老会、1928。（島山安昌浩先生全集編集委員会『島山安昌浩全集』第5巻、島山安昌浩先生記念事業会、2000、pp.76-78、参照）
 - 11 甲申政變（1884年政変）とは、1876年の開港以後に展開された開化と改革政策が、壬午軍乱（1882年軍乱）の時に清の支援を受けて再執権した守旧派によって政治改革が後退していく時期に、守旧派を肅清して新しい改革政府を建てようとしたクーデターであった。クーデターは一時的に、守旧派を除去し政府を掌握することに成功したが、清の軍事介入によって、三日天下に終わってしまった。
 - 12 張圭植（チャ・ギュシク）、「開港期における開化知識人の西欧体験と近代認識」『韓国近現代史研究』第28集、韓国近現代史学会、2004、pp.7-37。
 - 13 「甲申政變」（1884年政変）と「独立協会」を比較すると、1884年政変は「上からの改革の追求」であって、独立協会は「下からの改革の追求」であった。甲申政變は、開化（改革）政策を表明していたけれども、相変わらず儒教的「為民思想」に留まっていた。これは「民のための政治」を追求してはいるが、「民による政治」を追求することではなかった。民の主体的参加に関する関心がなかったため、政治改革の力（原動力、支持勢力）を民衆から求めなかった。その結果、政治改革を軍隊または外勢（例えば日本）にしか依存出来ないものになってしまった。したがって守旧派を除去し、新しい内閣を構成し、素晴らしい改革案を発表しても、外勢の裏切りと、より大きい軍事的力によって、簡単に突然崩れてしまう空中楼阁のようなものにならなかつた。徐載弼は甲申政變の失敗後、米国内に亡命し、西欧の近代民主主義体制を直接に経験した。この直接的経験は彼の改革思想を変化させ、下からの改革、自主民権の重要性を自覚するようになった。박영신（パク・ヨンシン）、「上からの改革」から「下からの改革」へ：徐載弼の運動戦略の変化」『現状と認識』第20巻1号、韓国人文社会科学会、1996、pp.41-65。
 - 14 討論会は多様な主題を上げ、毎週開催された。討論は当時の重要な政治、経済、宗教、教育問題の中で一つを主題として選定し、左右両側に「左議」と「富左議」、「右議」と「富右議」という代表を立て、賛成と反対の討論をするようにした。その後、集まった会員達が二つの主張に対して自由に参加し、論争を深化させ、最後には会員の投票によって、主題の可否を決議する方式であった。討論会の初期には、社会と教育問題が主な主題として選ばれたが、段々政府官僚と政府政策に対する批判が中心主題になる政治討論の場として展開された。愼鏞廈（シン・ヨンハ）『独立協会研究』一潮閣、

- 1976、pp.263-264。
- 15 慎鏞廈（シン・ヨンハ）、「万民共同会の民主民権自強運動」『韓国史研究』第11号、韓国史研究会、1975、pp.205-291。
- 16 安昌浩の名前が一般会員として記録に出てくるのは1898年8月以後であるが、これは独立協会が民権啓蒙を超えて民権闘争に入った時期である。慎鏞廈（シン・ヨンハ）、『独立協会研究』上下、一潮閣、1976、p .101。
- 17 朴明圭（パク・ミョンギユ）「島山安昌浩の社会思想」『韓国学報』韓国学報、1983、pp.34-35。
- 18 万民共同会の勢力が拡大されていく結果に対して、当時権力の中心を占めていた保守派は危機感を覚えた。保守派は「猷議6条」が高宗皇帝から承認を受けた11月4日の晩に、「匿名書」事件を捏造した。これは独立協会が皇帝を廃位させて共和制を実施しようとする、という「匿名書」であった。これによって独立協会の幹部の全員が逮捕されて独立協会自体は解体を命じられた。
- 19 独立協会の解体と幹部連行の消息を聞いたソウル市民は、鍾路に集結して、万民共同会を開催、50日間継続したが、結局、12月25日に軍隊が派遣され、武力によって万民共同会が解散させられた。
- 20 「島山先生審問記」『島山安昌浩全集』第11巻、島山安昌浩先生記念事業会、2000、p.135。
- 21 慎鏞廈（シン・ヨンハ）「新民会の創建と国権回復運動」上、『韓国学報』1977、pp.35-39。
- 22 「大韓新民會通用章程」、国史編纂委員会『韓国独立運動史』1:資料編、1965、p.1028。「本會의 目的은 我韓의 腐敗한 사상과 習慣을 革新하여 國民을 維新케 하며 衰頹한 教育과 産業을 改良하여 事業을 維新케 하며 維新한 國民이 統一聯合하여 維新한 自由文明國을 成立케 함이다。」
- 23 安昌浩は以後「臨時政府」の内務総長に就任する時に行った演説においても「目標は単純に我が主権だけを求めることではなく、韓半島の上に模範的な共和国を建てる事である」と強調した。安昌浩『島山安昌浩a説集』、乙酉文化史、1983、p.114。慎鏞廈（シン・ヨンハ）「新民会の創建と国権回復運動」上、『韓国学報』1977、pp. 43-44。
- 24 その例として「義兵抗争」を挙げることができる。義兵抗争は独立運動史の中で重要な位置を占めているが、その論理と性格は儒教的政治体系を志向していた。權a培（クォン・ヨンベ）「韓末の<義兵文書>を通して見た中期義兵抗争の論理と性格」『朝鮮史研究』朝鮮史研究会、1995、pp.135-221。
- 25 鄭榮國（チョン・ヨングク）、「島山安昌浩の政治變動観と独立運動」『延世社会科学研究』1990、pp.83-94。이승현（イ・スンヒョン）「新民会の国家建設思想」『精神文化研究』第29巻第1号、2006、pp. 55-78。
- 26 박만규（パク・マンギユ）「韓末安昌浩の近代国民形成論とその性格」『歴史学研究』湖南史学会、1997、pp.429-456。정용화（チョン・ヨンホァ）「近代的個人の形成と民族－尹致昊と安昌浩－」『韓国政治学会報』韓国政治学会、2006、pp.5-24。
- 27 勿論、義兵抗争に参加した人々が後に独立軍隊に参加するようになって、独立運動のひとつの役割を果たした。しかし当時の義兵抗争に対する安の批判は意味があり、妥当であった。
- 28 これは「実力養成論」と呼ばれた。ところが安の思想は民の実力が優先的に必要であり、新たに成っ

た民による祖国独立は必ず成し遂げる、という主張であるが、むしろ反対の意味として、現在の朝鮮は独立する実力がないうために日本の指導を受けるはずである、と利用されたこともある。このような主張は結局、李光洙などの独立を否定する「自治論」に変質されるようにもなった。しかし安の思想で重要な事は民の主体性を覚醒させていることである。従ってこのように歪曲された実力養成論と区分するために彼の方法論を「新民思想」と呼ぶのが良いと考える。장동진 (チャン・ドンジン)「植民地における個人、社会、民族の観念と自由主義-安昌浩と李光洙-」『韓国哲学史論集』韓国哲学史研究会、2005、pp.41-70。

29 慎鋪廈 (シン・ヨンハ)「新民会の創建と国権回復運動」上下、『韓国学報』1977。

30 興士團出版部、『島山安昌浩』興士團出版部、1983、p.25。

31 甲申政變は開化思想の若い政治的エリート達が民の支持基盤を全く考えずに、起こした軍事クーデターであったし、東学農民戦争は農民の支持基盤を持っていたが支配勢力を倒せる軍事的実力が無かった。甲午改革は改革の良い内容を持っていたが民の啓蒙と同意を無視して日本の軍事的力に頼って行った一方的改革であったし、独立協会は民権運動の大きな進展を呼び起こしたが、全国的統一連合を成し遂げる実力を培養しなかったため、中央権力から打倒された。

32 同上、pp.27-28。

33 安昌浩「青年に送る文」『安島山全書』中：言論資料編、범양사、1990、p.29。

34 島山^{ドサン}記念事業編『安島山全書』中：言論資料編、범양사、1990、p.9-10。

35 安昌浩が構想した新民思想（民が主人になる国、国の実力を持つ民）は民族主義という土台の上に立っていた。何故なら当時の国際秩序は民族国家という単位で構成されていたので、民族の独立を確保しなければ民の主権を追求する土台を喪失するしかない、と認識したからである。彼は民族主義という時代的な限界の中に立っていた。

36 柳永模と安昌浩は宣教師が建てた同じ学校に通ったし、キリスト教に入信した時には教会生活に熱心な青年期を送った。

37 朴永浩 (パク・ヨンホ)『多夕柳永模の生涯と思想』上、文化日報、1996、pp.80-85。

38 柳永模は崔南善が発行した雑誌である『東明』第2号（1922年9月10日）に李昇薫に関する文を載せた。

39 同上、pp.86-91。

40 韓国語参考文献の索引（ひらかな順）

アン・チャンホ (安昌浩)『島山安昌浩論説集』乙酉文化史、1983。<안창호 (安昌浩), 『島山 安昌浩論説集』, 乙酉文化史, 1983. >

アン・チャンホ (安昌浩)「青年に送る文」『安島山全書』中：言論資料編、범양사、1990。<안창호 (安昌浩), '청년에게 부치는 글' 『안도산전서』 중: 언론자료편, 범양사, 1990. >

イ・マンヨル (李萬烈)「島山安昌浩と基督教信仰」『韓国近現代史研究』22集、韓国近現代史学会、2002。<이만열 (李萬烈), '도산안창호와 기독교 신앙', 『한국근현대사연구』 22집, 한국근현대사

- 학회, 2002. >
- 이·만요르 (李萬烈), 「旧韓末における韓国信徒における民族意識の形成過程」『韓国史論』 1973. >
- <이만열 (李萬烈), '구한말 한국교인의 민족의식 형성과정', 『韓国史論』 1973. >
- 이·도크주 (李德周) 「日帝下の基督教民族運動と社会主義」『神学と世界』 監理教神学大学, 2008. >
- <이덕주 (李德周), '일제하 기독교 민족운동과 사회주의' 『신학과 세계』 감리교신학대학, 2008. >
- 이·스니ョン 「新民会の国家建設思想」『精神文化研究』 第29卷第1号, 2006. <이승현, '신민회의 국가건설사상' 『정신문화연구』 제29권제1호, 2006. >
- クワン・ヨンベ (權寧培) 「韓末の<義兵文書>を通して見た中期義兵抗争の論理と性格」『朝鮮史研究』 朝鮮史研究会, 1995. <권녕배 (權寧培), '한말 <의병문서> 를 통하여 본 중기의병항쟁의 논리와 성a', 『조선사연구』, 조선사연구회, 1995. >
- 興士團出版部, 『島山安昌浩』 興士團出版部, 1983. 흥사단출판부, 『도산 안창호』, 흥사단출판부, 1983. >
- 国史編纂委員會 『韓国独立運動史』 1: 資料編, 1965. <국사편찬위원회, 『한국독립운동사』 1: 자료편, 1965. >
- シン・ヨンハ (愼鏞廈), 「万民共同会の民主民権自強運動」『韓国史研究』 第11号、韓国史研究会, 1975. <신용하 (愼鏞廈), '만민공동회의 민주민권자강운동', 『한국사연구』 제11호, 한국사연구회, 1975. >
- シン・ヨンハ (愼鏞廈), 『独立協會研究』 上下、一潮閣、1976. <신용하 (愼鏞廈), 『독립협회연구』, 일조각, 1976. >
- シン・ヨンハ (愼鏞廈) 「新民会の創建と国権回復運動」上、『韓国学報』 韓国学報, 1977. <신용하 (愼鏞廈), '신민회의 창건과 그 국권회복운동' (상), 『한국학보』, 한국학보, 1977. >
- ジョン・ヨンホァ 「近代的個人の形成と民族-尹致昊と安昌浩-」『韓国政治学会報』 韓国政治学会, 2006. <정용화, '근대적 개인의 형성과 민족-윤치호와 안창호-' 『한국정치학회보』, 한국정치학회, 2006. >
- ^{ドサン} 島山安昌浩先生全集編纂委員會 『島山安昌浩全集』 第5卷、島山安昌浩先生記念事業会, 2000. <도산 안창호선생전집편집위원회 『도산안창호전집』 제5권, 도산안창호선생기념사업회, 2000. >
- ^{ドサン} 島山安昌浩先生全集編纂委員會編 『島山安昌浩全集』 第11卷、島山安昌浩先生記念事業会, 2000. <도산안창호선생전집편집위원회 편 『島山安昌浩全集』 第11卷, 島山安昌浩先生記念事業회, 2000. >
- ^{ドサン} 島山記念事業会, 『安島山全書』 中: 言論資料編、범양사, 1990. <도산기념사업회, 『안도산전서』 중: 언론자료편, 범양사, 1990. >
- チェ・ギヨン 「島山 安昌浩の基督教信仰」『島山思想研究』 5、島山思想研究会, 1998. <최기영, '도산 안창호의 기독교 신앙' 『도산사상연구』 5, 도산사상연구회, 1998. >
- チャ・ギュシク (張圭植), 「開港期における開化知識人の西欧体験と近代認識」『韓国近現代史研究』 第28集、韓国近現代史学会, 2004. <장규식 (張圭植), '개항기 개회지식인의 서구체험과 근대인

- 식, 『한국근현대사연구』 제28집, 한국근현대사학회, 2004. >
- チャン・ドンジン 「植民地において個人、社会、民族の観念と自由主義」 『韓国哲学史論集』 韓国哲学史研究会、2005. <장동진, '식민지에서의 개인, 사회, 민족의 관념과 자유주의' 『한국철학논집』, 한국철학사연구회, 2005. >
- チョン・ヨングク (鄭榮國)、「島山安昌浩の政治變動観と独立運動」 『延世社会科学研究』 1990. <정영국 (鄭榮國), '도산안창호의 정치변동관과 독립운동', 『연세사회과학연구』, 1990. >
- チュ・ヨハン (朱耀翰) 『安島山全集』 上: 傳記篇、범양사、1990. <주요한 (朱耀翰), 『안도산전집』 상: 전기편, 범양사, 1990. >
- パク・ミョンギユ (朴明圭) 「島山安昌浩の社会思想」 『韓国学報』 韓国学報、1983. <박명규 (朴明圭), '도산 안창호의 사회사상' 『한국학보』 한국학보, 1983. >
- パク・マンギユ 「韓末安昌浩の近代国民形成論とその性格」 『歴史学研究』 湖南史学会、1997. <박만규, '한말 안창호의 근대국민형성론과 그 성격' 『역사학연구』, 호남사학회, 1997. >
- パク・ヨンホ (朴永浩) 『多夕柳永模索の生涯と思想』 上、文化日報、1996. <박영호 (朴永浩), 『다석 유영모의 생애와 사상』 상, 문화일보, 1996. >
- パク・ヨンシン、「上からの改革」から「下からの改革」へ: 徐載弼の運動戦略の変化」 『現状と認識』 第20巻1号、韓国人文社会科学会、1996. <박영신, '위로부터의 개혁에서 아래로부터의 개혁으로: 서재필의 운동전략 변화' [현상과 인식] 제20권1호, 한국인문사회과학회, 1996. >
- パク・ヒョウセン、「韓国基督教の医療運動史」 『韓国基督教成長100年』、基督教文社、1986. <박효생, '한국기독교의 의료운동사', 『한국基督教成長100년』, 基督教文社, 1986. >

